石井規衛教授

石井規衛教授　ロング・インタビュー

聞き手：クリオ編集部・石井先生大学院ゼミ生
於西洋史学研究室教員会議室

クリオ：石井先生、お忙しいところありがとうございます。今回はクリオに掲載するインタビューということでよろしくお願い致します。石井先生らしく、「自由かつ大胆」にお話しして頂ければと思いますので。

石井：参ったな（笑）。だけどなにを、どこから話し始めたらよいでしょうか。

クリオ：それでは、さしあたり学生時代のお話しから聞かせて頂きたいのですが、学部時代、大学生時代のお話しを、当時の東大にいらした先生との関わり等々も含めてお話しして頂ければと思います。

石井：丁度僕が大学に入ったのが 1967 年です。もともと駒場では教員との関係は薄いものなのですが、翌年から、御存知の通り、学内ですったもんだが起こりました。そのため、ながらく授業がなく、先生方と接するわずかな機会も失われました。そればかりか、教員になかなか接近しようとしない雰囲気までも生まれてしまいました。僕個人としていえば、入学直後から授業はほとんど出てませんでしたね。本郷に進学して初めて先生方と接することになりました。だから、本郷にゆくまでの駒場時代に、どんなに幼稚ではあっても、ある程度知的営みを自分で進めてゆかざるを得ませんでした。そうした経験がなかったならば、いまの私は一体なにをやり、なにを考えているのか。いずれにせよ違ったものだったでしょう。そういう意味で、僕にとって駒場時代は大きな意味を持っていました。このことを最初にいっておかなければいけません。だけど、駒場時代にはいろんなことがあり…、それについてはこれくらいにしておきましょうよ。あまり語りたくない（笑）。

クリオ：それでは、そのように教員との距離がある中で本郷に進学するにあたって、どのようにして西洋史を、選ばれたのでしょうか？

石井：それについても少々込み入った事情がありました。たしかに本郷に進学した際は西洋史を勉強しようと思っていました。だけど、大学に入ったときは、哲学を勉強しようと思っていたんです。この意思はかなり明確でした。ちょっと生意気なようですけど、高校の時からヘーゲルを読んでいて、分かったとは到底言えないけれども、とても惹かれるものがありました。そして大学に進んだならばヘーゲルを勉強しようと。なぜヘーゲルなのか。そこにこそ時代的な背景があったのです。当時は広義のマルクス主義運動が高校生のレベルにも浸透していたのですよ。例にもれず、僕もそれに触れたわけです。そこでマルクスをちらほら読みだしたわけです。分からないなりに『資本論』第一巻を読んだ。同じ頃に読んだ『経済学哲学草稿』は、おそらく彼がフォイエルバッハの影響をもろに受けていたせいでしょう、高校生には口当たりがよかったのです。だけど、マルクスを理解するにはやっぱりヘーゲルを理解しなければだめだ、と高校の倫社の先生に助言されて、高校生の小遣いでも手に入る『小論理学』（岩波文庫、上下）をまず読み始めたというのが、僕のヘーゲル事始です。

　だけどそのうち、だんだん、もっと具象的な世界をなんとか掴みたい、というのが一つあります。その一方で、そういったマルクスとかヘーゲル、とりわけヘーゲルの哲学が、古代からの知を総合しているとまでは言えないけれども、すくなくともそれらを踏まえていた。

要は、彼らは、西洋文明というのをバックグラウンドにしており、アリストテレスとかソクラテスとかから始まる流れの中で、ヘーゲルとかマルクスを理解していかなければならないんだろうと。

では西洋文明を理解するためには、どこから手をつけたらよいのか、となったら、やっぱり中世史じゃないか、と思われました。中世の科学哲学っていうの？また要するに、いやこれは昔の僕の貧しい知識でしかないけど、ギリシャ哲学を復活させたり媒介したりしたのはアラブ人とか、そういう研究がありましたよね。だからそれで中世の科学思想っていうのは、結構なんかこう、西洋文明の「へそ」、古代と近代に至る「へそ」、「へそ」って分かります？うまく言えないんですけど・・・。

クリオ：結節点のようなものでしょうか？

石井：うんうん、そこに手を付ければ、マルクスやヘーゲルが背負っていた、あの西洋文明を鷲づかみできると思い込んでしまったのです。若い時分に抱く妄想って、すごいですね(笑)。とにかく、そういう「妄想」が背景にあって、西洋史に進学したんじゃないでしょうか。そのさいの動機には、残念ながらロシアのロの字も出てこないんです。だからといって、ソ連についての関心がなかったのではありません。いや、まったく逆でした。頭のもう半分は、ソ連の問題にかかりっきりでした。つまり、マルクスとかヘーゲルのバックグラウンドとしてあった、分厚い広がりのある西洋文明を鷲づかみすることと、もう一つのソ連（ソヴィエト期ロシア）の人たちの声を聞くこと、これら二つは、本郷に進学するときの僕にはワン・セットだったんです。二番目のものはどういうことかっていうと話がまたややこしくなるんですけども、いいですか？

クリオ：どうぞ、お願いします。

石井：やはり高校のときから、ソ連についてのさまざまな悪口雑言をしばしば耳にすることがありました。だけれど、それはすべて観念的な議論なのです。そもそも誰もソ連に行ったことはないんですから。にもかかわらず、ソ連が良いとか悪いとか、イデオロギーのレベルで勝手気ままに文句言ってるのです。しかも抽象的な概念を用いて。そんな議論はどこか信じられない、ソ連の人々と、いったいどういった関係があるのだろうか、といった釈然としない気持ちが生まれていました。ソ連の人たちは共産党のイデオロギーの下で暮らしてるけど、実際の生活はもっと豊かで、不合理で、重々しくもあれば、軽薄でもあるものではないのか。それに対して、なにかやせ細った議論をしているような気がし始めていました。そんなイデオロギーっていうのは、ソ連を擁護するものであれ、批難するものであれ、僕は一つの抑圧体系じゃないかと。イデオロギー一般がね。どんなものであれ。

クリオ：そのイデオロギーの下にある人々の実際の生活に関する興味が出てきたと。

石井：そうそう。そちらの方面を見ないで、やれトロツキーがとか、スターリンがとかそんなこと言ったって、話にならないじゃないですか。ソ連の人と実際に会ったこともないのに。だから、一方で、ソ連当局が、自分の社会は社会主義である決めつけている現実があり、ということは、ソ連で現に暮らしている人々を、生活状況全体の側から存在論的に拘束することを意味しているのである。それに対して、われわれ外界の人間が、そのイデオロギーと同じレベルで、あれは社会主義でるか否かとか議論することは、ソ連で現に生活する人々の存在論的な拘束に、たんに加担しているだけなのかもしれない。存在論的に、ですね。だから、

ともかくそういうのをぱっと捨て去って、まず、生身の人間の声を聞きたい。いわば最も抑圧、あるいは拘束されている人間が真理に最も近い言葉を語るってことが、ありうるかもしれない。そういう意味で、とにかくソ連に現に生きている人たちの声、そこに現に存在し生活している生身の人間としてのソ連の人たちの声が聞きたい、というのがありました。でもどうしたらよいのだろうか、という段階にずっと留まっていて、ただうろうろしていたのです。いずれにせよソ連への関心は、ずっとありました。だけど、それは大学の勉強の世界とは違うレベルだったのです。くどいようですけども、マルクス、エンゲルスも、かれらなりに西洋文明を背負っている。そして古代ギリシャも古代ローマも中世も近世も、そして近・現代も、自由自在に語れてしまう。そういったものを背負った上で、マルクスの思想があり、またヘーゲルの思想っていうものがあると。そういうことで西洋史に進学したのです。なんか後知恵で潤色された、えらく模範生みたいな言い方ですね（笑）。

クリオ：西洋史に進学した段階では、まだ具体的にロシア史という話ではなく、先ほどの話ですと、中世の…。

石井：そうそう、中世の思想史を。中世史では堀米庸三先生まだ本郷にいらした。先生はゼミでマルク＝ブロックの英訳版『封建社会』をテキストにしていて[1]、出席する学生はかなり多かったですが、好々爺というイメージ以外、あまり印象に残っていないですね。あとは林健太郎先生。彼の写真はどこかな。（周りを見渡して）

クリオ：それです。（研究室に飾られた写真を指さし）

石井：彼のゼミにも出ていました。たしか一限目でした。使われていたテキストは啓蒙主義を扱ったドイツ語の論文。出ていたのが二、三人くらいだったかな。正直言って面白くなかったですね。林先生も、つまらなそうにやっていた印象が残っている。だって揉めた後でしょ。

クリオ：そうですね。

石井：そうでしょう。だからね。

クリオ：教員の側も、学生との距離があったということでしょうか？

石井：あったんでしょうね。つまんねーな、っていうね。それからあと、のちに大学院で指導教官を引受けて下さった柴田三千雄先生の写真は学生の読書室に掲げられていますよね。先生はフランス語のテキストを用いたゼミを開講してらした。堀米先生ほどではなかったけれども、かなり多くの学生が出席していました。パリ・コミューンを扱ったジャック・ルージュリの論文をテキストに使っていました。覚えている限りでは、特に熱っぽく語るようなことなく、ほかの先生ととくに変わったところはありませんでした。しかしどこかクールというか。林先生と似た雰囲気が感じ取れましたね。当時の僕は、真面目な学生だったとはいえないことだけは、確かです

柴田先生と並んで写真が掲げられているのが、成瀬治先生。先生は怪我で半年授業がありませんでした。怪我から復帰したときのゼミの出席者も、少なかったですね。テキストは覚えていないですが、近世の国制史関係のドイツ語論文だったはずです。成瀬先生のお仕事は、取っつきにくいという印象を学生に与えていたのかもしれないですね。1972年の『思想』に阿部謹也「ハーメルンの笛吹き男」が掲載されたのを端緒として一種の「社会史ブーム」が

[1] Marc Bloch, *Feudal society*, trans. by L.A. Manyon, foreword by M. M. Postan, 2nd ed., London, 1962.

起こりますが、学生の気分と感性は、すでにそういった方向へ向かっていたのではないでしょうか。相変わらず真面目な学生ではなかったけど、僕は成瀬先生の説明される国制史や概念史(Begriffsgeschichte)なんかけっこう惹かれるものがあった。とくにオットー・ヒンツェの論文が印象に残っていて、ゼミとは別に短い論文でしたが、辿々しいドイツ語力で自分で読んでいました。

古代史の伊藤貞夫先生や城戸毅先生も赴任したばかりで、ゼミも講義も出ていなかったのは、今思うと残念です。堀米先生が退官し、後任として樺山紘一さんが着任された。

全般的に見て、今と違い、教員とは離れた関係でした。今はなんというか、まるで運命共同体みたいですね。博論執筆が前提となっているからなのかなぁ。昔は、というか正確には僕が本郷に進学したときは、まるでバラバラの状態でした。また学生の側もなかなか教員に対する警戒心を完全に解くほどまでにはいかなかったのでしょうね。そもそもそうした学生は、どんなに優秀だったとしても、大学を去っていきました。それだけ東大のすったもんだは大変だったんだと思います。学生が自分の大学の先生を角材で殴るってこと、今します？

クリオ：今ではとても考えられないですね。

石井：考えられないでしょう？だけど、そういうことが実際あったわけです。そして溝は残り続けていた。これは大変不幸な事態でした。教員と学生の関係は、いずれにせよ一筋縄ではいかないようなものだったのではないでしょうか。僕はそうした状況におかれていた学生の一人にすぎなかったですが。

クリオ：当時の全体的な状況として、そういう空気が大学にあったと。

石井：はい。そういった中で教員と学生の間の媒介になったのが、当時の助手だった北原敦さん、松本宜朗さん、それから坂巻清さん。あの先輩たちが、学生と教員の間のクッションとなっていたのではないでしょうか。昔の二宮宏之先生の『クリオ』のインタビューを読んだことありますか？[2]あれを見ると、仲良しクラブ的な西洋史共同体っていうのが浮んできますが、ああいった世界は、まったく無かったですね。

クリオ：そういった中で、最終的な研究のテーマを決定されて、大学院進学を決意されたのは、どのような経緯があったのでしょうか？

石井：結論だけ先にいうと、ソヴィエト期ロシア社会を見極めるために大学院への進学を決めたのです。その理由は、当時、ソ連（ソヴィエト期ロシア）をめぐる知的状況がどんどん変化していったこと、それにつれてその問題への関心が私の内部でいっそう大きくなっていったこと、です。やっぱり本腰を入れて取り組まねばならないし、また可能であると。西洋文明っていうものへの評価、そして中世が「へそ」である、という評価は変わりませんが。彼らの地の声を聞きたいという一つのモチーフ、イデオロギーからなるべく、あるいは別の言い方をすればソ連全体を覆っている、あるいは捉えているコスモロジー・・・イデオロギーとでどっちがいいんだろう。どっちの方が包括的かな、僕はコスモロジーの方が包括的な気がすんですけどね・・・。

クリオ：包括的だとは思いますが、大きくなりすぎではないでしょうか？

石井：いや、それほどまでのものですよ、当時のソ連の人々を捉えていたものは。イデオロギー、などといったお行儀のよい言葉では、到底捉えきれないほど、人の生活全体を捉えて

---

[2] 「インタビュー　二宮宏之氏にきく」（『クリオ』6号、1992年所収）。

いたものです。それはさておき、そのコスモロジーからなるべく遠い世界、なるべく絡め取られていない生活領域、そこにこそ聴くに値する生の声がきこえる場なのかもしれないと。では何が一番遠いのか。共同体農民が、彼らの存在形態、あるいは存在態様として、ソ連のコスモロジーから一番縁遠いと思われました。なぜかといえば、「マルクス主義」の歴史理論には、ロシアのミール共同体は、どうみたって入って来ないのですよ。オーソドックスなマルクス主義というのは、資本主義の確立を大前提とし、最終的には社会主義革命が起こって、社会主義社会に行く、という理解です。それによれば、三圃制に基づく共同体は、とっくに解体していないといけないような前資本主義的な存在のはずです。ところが 1917～18 年にロシアで起こったのは、三圃制農法に基づく共同体の全面的な復活なのです。しかも、シベリア地域ではそれは、発展途上にあったのです。じつはその革命は、最も非マルクス主義的な革命だったのです。だから、共産党が司祭のように管理し統括しているマルクス主義的コスモロジーから最も縁遠い世界といえるのです。そこでこそ、もしかしたら生の声が聞こえるかもしれない。そういった理由で農民問題に手をつけてみたのです。ソ連のコスモロジーとは異質な生の人間から出発して、その後に、あらためてソ連社会総体を再構成することを目指した、ということでしょうね。とにかくイデオロギーというか、コスモロジーに包まれた世界の内部への突破口、手掛かりが開けるのではないかと、考えたわけです。すこし中世社会と似たところ、ないですか？中世だってほら、神学的、あるいは神様の言葉と切り離して日常生活って考えられないでしょう？

クリオ：そうですね。史料上残っているレベルですと。

石井：そう史料のレベルだとね。

クリオ：書いてる人たちっていうのは、そういう人たちですね。

石井：そうでしょう？それで、だけど生の現地の人間っていうのは中世史研究者はどうやって探る訳ですか？玉ねぎの皮をむくみたいにコスモロジーを剥いでかなきゃ、生の人間てのは分からん訳ですよ。だから、そういうところで中世史とソ連史っていうのは似てるんだと思います。

ソヴィエト期ロシアの農民問題というテーマに移るには、時代状況が影響を与えていたのかもしれないです。あの頃ね、公害とかさ、四日市とか、何でしたっけ？

石井ゼミ生：水俣病？

石井：そう、水俣病とかイタイイタイ病とかが大きな社会問題となっていました。反工業文明、反近代文明、近代の告発が、結構流行っていたわけです。それで一種のお百姓さんブームがありました。要するに工業文明に対するアンチっていうんですか？それに対してソ連とは、工業化の一つの典型例だと。だからソ連を批判的に見ることと、いわば「農の思想」というものが重ねあわされても不思議はないような知的状況でした。もっとも僕個人には、そういった類の影響の程度は薄かった。だけど時代が時代だったから、無意識のうちに影響を受けていたかもしれない。その関連で付け足すと、僕は田舎もんだったからでしょうかねぇ、農村や農民をテーマとしてとりあげるのに抵抗感がなかったなぁ。東京の足立区出身です。

クリオ：足立区を田舎と言われても、我々はちょっとピンと来ないのですが。当時の足立区っていうのは都市部ではなかったということでしょうか？

石井：ド田舎です。荒川放水路――いまは単に荒川とよばれますが――や、さらには東武鉄

道伊勢崎線を越えた東側の世界は別世界で、いわば未開の地でしたね（笑）。荒川放水路のこっち、要するに北千住寄りは上野や、都心と直結する文明の地なんだなあ。少なくとも子供の時の印象ではそうでした。そこで生まれ育ったのです。僕はあの田舎が大好きだったなぁ。なんといっても田んぼがあり、稲穂がたわわに実り、秋になると木と竹で組んだ柵に稲穂をこうやって干して、それが良い匂いを放つのです。ああいうところでよく遊びました。白鷺がドジョウ食べにしょっちゅうやって来ましたね。それに白い土蔵がけっこう残っていましたし。そこに柿の木があったらね、絵になりそうな田舎の光景。だから僕は、近代化によってそのパストラルな世界が破壊されていくプロセスを間近に目撃していたのです。1960年代初め頃から都市化の波が押し寄せて、どんどん田んぼが宅地化されていきます。そのことがね、他人の土地でとやかくいえないのだけども、なにか釈然としない気持ちを持ち続けていた。これはノスタルジーにすぎません。いずれにせよ共同体農民の伝統的世界を取り組むのに抵抗がなかったことだけは、確かです。

以上に述べたものよりもはるかに重要で、そして決定的だった契機とは、ソ連世界をどう捉えるのかという問題と絡んだ議論が、当時登場していたことです。その議論を引き起こしたものとして、まず挙げるべきは東京大学法学部の溪内謙先生の『スターリン政治体制の成立』第一巻が、1970 年に刊行されたことです[3]。これは一つの事件でした。溪内先生の議論は、まさにソ連世界をどのように捉え、評価するのかに、真正面から取り組んだものでした。つまり、公的機関による穀物調達難に直面した体制の指導部は、伝統的な共同体的農村社会を強権的にコルホーズ的、ソフホーズ的に再編成することで対応したが、その結果、スターリン政治体制と呼ぶ、極度に中央集権的な体制ができ上がった。しかも、共同体を直接利用した結果、個人の自覚をもつ近代的な市民の形成過程を、いわば素通りし、それのみか「アジア的な後進性」が体制に浸潤することで、ソ連社会主義は「理念的」的に決定的に歪曲されたのだと。このように溪内先生の議論は、共同体を体制の本質論と関係づけていたわけです。

ロシアの将来にとって、なおも広汎に存続する共同体の持つ意味は、革命前のロシアで、すでに議論されていました。とくにマルクスの思想の影響を大なり小なり受けた政治運動家の間では、「社会主義」像にとって共同体の持つ意味とはどのようなものか、としてです。オーソドックスなマルクス主義者は、ロシアを社会主義的に改造する前提として、前資本主義的な共同体は解体されなければならないと主張し、ナロードニキの系譜のものは、共同体を直接社会主義的に改造できることを主張したわけです。そこで、ジュネーヴで亡命生活を送っていたヴェラ・ザスーリチという一人のマルクス主義者が御本尊（マルクス）に直接聞いたのです。そうしたら、マルクスが、ある条件が整えば、共同体を前提にして共産主義社会へ行けると、返信しました。マルクスが彼女に宛てた書簡と、その下書きは『ヴェラ・ザスーリチへの手紙』と総称されています。このマルクスの考えは、オーソドックスな「マルクス主義」に反するものとみなしても良いようなものでした。このことは、ソ連のイデオロギーを相対化し単線的な発展段階論を批判する動きを、おおいに促進する効果をもつものでした。そうした流れにある重要な仕事が、和田春樹先生の『マルクス・エンゲルスと革命ロシ

[3] 溪内謙『スターリン政治体制の成立』（岩波書店、1970-86 年）。

ア』です[4]。

以上の動きは、ソヴィエト期ロシアにおける農村社会それ自体を理解しようとする動きに、大いに弾みを与えたのではないでしょうか。そういった議論は、僕が本郷に進学した前後に登場してきたのです。議論を確実なものにするためにはソ連における実態調査的な仕事が前提でしょう。1917年～18年の革命期に、三圃制共同体が全面的に復活したことは、1920年代まで、ソ連の同時代人の間では広く知られていました。だが、その後は、あまり聞かれなくなりました。ところが農村社会史研究の泰斗ビクトル・ペトローヴィチ・ダニーロフが1950年代の後半に、共同体の実体的な論文を公表し、ひろく注目を集めることになったのです。というわけで、僕は、ダニーロフのほとんどの書物や論文を読んで、農村社会史のような卒論を書いてみたわけです。

そのときに頭にあったのは、20年代に農民層の階層分化がすすみ、一方で、資本家的な農民が、他方で、プロレタリアートや貧農が形成され始め、農村内に階級闘争的な状況が生み出される、という「議論」への、子供っぽい反発だった、と記憶しています。なぜならば、そうした論法は、スターリンの「クラーク一掃を伴う全面的集団化」という広汎な国家暴力をともなう政策の実行を合理化するものであったために、いわゆる「マルクス主義」では金科玉条となっていたからです。農民の階層を規定する際、播種面積とか、所持する役畜（おもに馬）数、雇用労働の利用の有無、といった外形的指標を採用しているのは説得力に欠けること。出稼ぎによる収入とか、家族構成（食いぶちと働き手）を詳細に検討することなどが必要であり、最終的には家計調査が不可欠であり、それなくしては農民経営の貧富を規定できない、などと、ごく当たり前のことを述べたのです。しかし、当時の農民はほとんど家計簿をつけているわけではありません。そのようなレベルの研究は、結局は、なによりも先ずソ連の人がやるべきではなかろうか、と思うようになりました。そもそもいくら統計を積み重ねても、人間の心までを読み取ることは不可能です。そこで修論では、新たな方向性を見つけざるを得なくなってしまいました。

クリオ：それで、修士論文では農村社会史とはまた別のテーマに取り組まれたということでしょうか？

石井：そうです。修論は全然違います。テーマもそうですが、それ以上に視点が全然違っていた。むしろ体制について扱ったことになります。当初はまだ、明確に「体制」を意識していなかったけれども。修論は1977年に『史学雑誌』に掲載された文章のもとになりました。

石井ゼミ生：「『ネップ』初期研究」ですね[5]。

石井：さきほど述べましたが、およそソ連史に取り組もうとするやただちに他を圧するほどに大きな問題として立ち現れるのが、農業の集団化という社会の大変動を伴った大事件です。幾千万の人々の日常生活を国家が上から強権的に変えるという、大変な事件です。ものすごい暴力が伴い、そして数十万、場合によっては数百万の人間がその中に命を落とし、あるいは収容所とか、そういった僻遠の地へ追放されたりした。それで、1、2年もしたら農業の体質が衰えたから、数百万っていう餓死者がでる大飢饉をむかえるというわけです。

---

[4] 和田春樹『マルクス・エンゲルスと革命ロシア』（勁草書房、1975年）。

[5] 石井規衛「『ネップ』初期研究――『商品交換体制』の成立をめぐって」（『史学雑誌』86号12編、1978年所収）。

クリオ：言わば人災のように捉えるべき、ということですか。
石井：はい、これは為政者が引き起こした側面がある。そうである以上、続いてもう一つの問いがごく自然に起こってくるのです。その集団化を、なんとか回避できなかったのかっていう問いもありました。そして、スターリンが採用し推し進めた政策とは別の選択肢（オールタナティヴ）がはたしてありえなかったのか、それとも可能でもあったのか、といった議論も起こるのです。スターリンが結果的に実行したことに対して、研究者の間でもっとも注目されたのが、ブハーリン（ソ連共産党中央委員会政治局員）が求めていた路線というか、政策体系でした。ブハーリンの政策構想は、体制と農民の間に、もっと理性的で、穏やかな相互関係を継続することを保障していたのではないのか、と見なされるようになりました。

そうした議論の前提にあるのが、最高指導部の立場からみた政策論に合せている点です。当時の共産党のリーダーの能力を、全能視しているとまでは言えませんが、それでもやや過信しているきらいがある。リーダー如何によって、政策の骨格が正反対のものにもなりうる、といった考えが背景にあるのではないでしょうか。それでも、この議論には政策論という、それまで私が関わってこなかった世界に取り組むきっかけを与えてくれたのです。

農業の集団化は、同時に進行していた、済し崩し的にテンポが高まりゆく工業化、とくに重工業を中心とした工業化の製作と密接に絡み合っていたのです。そればかりか、体制の存続にも関わっていたのです。その集団化政策のきっかけになったのが、公的調達機関の穀物の調達難でした。農民が穀物を国家に売らなくなっちゃうんですよ。そうするとただちに都市に住んでる人はお腹空いちゃうでしょう？役人もお腹空いちゃうでしょう？それから赤軍兵士もお腹空いちゃう。もっと重要なことは、こういったことにあります。つまり、あの当時、工業化を進めることが為政者にとって切実な政策課題となっていた時期であり、工業化の原資を、穀物を国外に売って獲得しようとしていた。それによって機械とかいったものを獲得する予定であった。だから、なるべく多くをお百姓さんが国家調達機関とか公共調達機関に売ってくれないと困る訳ですよ。しかもこれまたなるべく安い価格でね。じゃないと、暴力的に取るしかない。暴力的に取っていた時期がありました（戦時共産主義期［1918年～1921年］）。暴力的に取られると今度お百姓さんは、取られるくらいだったら播種面積を減らしちゃうんです。そうすると国家はもっと困っちゃう。だから1921年にネップへと政策転換したわけです。1927年に穀物調達難に直面した体制の指導部は、播種強制と、確実に農産物を国家に引渡さざるをえないような装置の一環として、農村社会のコルホーズ的、ソフホーズ的な再編編制を強行することになったわけだ。

問題は、なぜ農民が穀物を引渡す（販売する）ことを渋ったのか。この問いは、見方を変えれば、なぜ政府の政策は、販売意欲を呼び起こせなかったのか、と言い換えられるだろう。こうした観点は、農業経営者としての農民の行動を、いわば「外から」観察し、かつ検討することを意味します。つまり、価格政策、信用政策、商業政策など、ありとあらゆる政策を駆使する為政者の観点から眺めることを意味するわけです。

そういったことで、農民経営を取り囲む当時のさまざまな経済政策について、とくに商業の実態と経済政策について勉強しはじめました。ただ商業と言っても、あまりにも漠然としているので、修論を書く場合にはもっとテーマや史料を具体的に詰めていかなくてはいけない。で、内戦が終ろうとする時期に、国家の規制を減らし、その分だけ市場関係を導入した

ネップ的な関係が形成される局面を、総合的に、多面的に分析してみようと思いました。それで史料をいろいろと読みだしました。いわゆる戦時共産主義から、ネップへどのように転換していくかという転換局面を、なるべく為政者に沿って書いたわけです。この時の為政者の代表で最高指導者はレーニンですね。彼はほとんどの統治領域に直接間接関わり、文書を残しているのです。そこで『レーニン全集』を隅から隅まで読み込みました。誤解しては困りますが、『レーニン全集』をレーニンの論文や演説集ととらえてはいけません。むしろ『レーニン関連文書全集成』と呼んだ方が、より正確でしょう。権力を取った後にはレーニンは、もっぱら行政の実務に没頭していました。だから、『レーニン全集』を読む場合、思想家として読んだらまず理解できない。あれは、行政官や為政者の文章群なのです。そうしたものとして読むと、たいへん面白い。僕が勉強してた頃のソ連は、呪わしいくらいに検閲が浸透していたけれども、『レーニン全集』については、なるべく完璧に近いものを出そうとするのです。ちょっとした、こういったところにチョコチョコチョコって書いたものまで。

石井ゼミ生：走り書きということですか？

石井：そういうことです。断簡零墨全て収めようとしていました。それによってレーニンの統治行動の全容にほぼ近いものを掴めるんです。この政策転換の局面でレーニンが日々どう対応したのかをつねに念頭に置きながら分析しました。その結果、ある政策体系が浮かび出てきました。それを論じたのが修論でした。それをさらに歴史的コンテキストも含めて『史学雑誌』の論文に仕上げたのです。それは、僕個人にとって大きな意味を持つ体験でした。ガラッと変わりましたね。結論だけちょっと言っておくけど、一つはダイナミックな「国家」、あるいは「体制」っていうのを「発見」したということがありますね。その為政者レーニンが政策の転換局面で、どう生き、どう対応し、同僚に対してどう関わったのか、等ですね。そこには社会主義といった抽象的な概念が入る余地のないような、即一事物的な国家行動に従事する生身の人間としてのレーニンが浮んできました。そこに、なにか今までは考えていたソ連社会主義社会のイメージと全然違う、生身の統治者レーニンと生身の百姓との鍔迫り合い、そこに生身の軍人、生身の政治警察要員（チェーカー）といった、生身の色んな人間同士の鍔迫り合いの世界が見えてきたのです。これは、僕にとっては大発見だった。

修論の時に見つけたものを補足すれば、内政が大きく転換する時に、外政も密接に絡みあっていることでした。1921年に英ソ間で通商交渉も並行しておこなわれていました。それについては、レーニングラードのシーシュキンの非常に緻密な研究があるし、アメリカの外交史家ウルマンは、モスクワとロンドンの間の通信を傍受したものを史料として使って英ソ関係の書物を書いています。米ソのすぐれた研究を対比させながら、外交と内政が大きな転換局面で複雑に絡み合う様を確認し、外交史研究の重要さを痛感させられました。

それからもう一つは、スターリンがやってるのは「正しい」とか「間違って」いるといったレベルで議論してもしようがないという考えも、固まってきました。農業の集団化はもうなりゆきとしてしか、いいようがないんじゃないかと、僕の「意に反して」理解せざるをえなくなってしまったのです。最初は僕自身もスターリンの振る舞いをネガティブに捉えようとしていました。当時にあってはごくごく自然な態度だったのです。だけれども、修論を雑誌論文へと整理する中で、スターリンを批判できなくなってしまいました。もう、僕があの修論書いて時期からは、知識世界の間で、どんどんスターリンに対する批判の論調、風潮は

強まっていったのです。ペレストロイカが起こる以前に、すでにそうだったのです。ところが僕は逆向きになっちゃったんですよ。スターリンはもう、動かしがたい。もうああいう風になるしかないんだ。スターリンをたんに「批判」したって意味がないんだ、とね。あの論文の結論は、確かそうなってるはずですよ。

石井ゼミ生：確か冒頭と結論の部分に集団化の思想を先取りして、内包してって表現していましたよね。

石井：そう。だからこそ困っちゃったんです。本当に困ってしまった。身動きがとれなくなってしまいました。今述べたように当時の知的世界では、いっそうスターリンへの風当りが強くなっているのに、僕だけが、それがどうした、といった具合いで。困ったなー、ていうね。それで、ちょっと修論書いた後は全くの引き籠もりか、ふてくされ状態でした。孤独、というと大袈裟かもしれないけれど、どうやって世の中と接点取ったら良いのか、っていうんですか、それがなかなかわからなくなる。スターリンは良いなんて、なかなか言えませんからね。もう隠れスターリニストみたいな（笑）。あのときは辛かったですね。本音みたいなものがなかなか出せない。自分の本音を積極的に言えない。「最低限こうなんだ」ってことを、まず認めようじゃないか、っていうところで叙述や議論を終えてしまっているのではないか。つまり、議論をそれ以上すすめ、公にすることは怖くてできないんですよね。ペレストロイカで皆気分が高揚してスターリンに文句言ってるけど、スターリンの重さってあなた方分かってるの？そうも言いたくなる訳です。とにかく引き籠もり気分は、かなり長く続いたとの思い出があります。それはスターリンを「再発見」したことの代償だったのかも。

それはさておき、繰り返しますが、修論を書き、論文にすることによってえられた一番の収穫とは、「体制」というか、「国家」を見つけたことなのです。修論のテーマは経済政策体系の転換でしたから、それよりもいっそう包括的な事象を見つけたと、思えたのです。それによって、こんどはじつに広い視界が開けてきたのでした。ソ連のアカデミーで生み出され、日本にも紹介されて結構流布していたソ連国家論とかソ連経済とかソ連社会主義経済論とかとは全然違った独自のものであった。のちに溪内謙先生の議論とつきあわせながら、それを党＝「国家」体制と呼んでおくことにしました。この関連でいえば、少なくともソ連初期の政治のダイナミズムを、ちょっと大げさな言い方かもしれないけど、僕は発見できた気がしました。僕はその後、お百姓さんの世界から離れて、経済政策の分野へ、そしてさらには国家の問題、体制の問題へと移ってしまいます。それから更に、ロシア革命の時期を超えて、国家との関連で革命前の方向に手をつけてゆくことになります。その結果、「一体全体ソ連とは何か」という問いが突きつけられることになった。そういう意味でも修論は、後の僕の色んな議論の出発点となり大きな意味を持っていたのです。

結局ソ連について、あれは良い国だとか、堕落した国だから悪いとかいう議論に参加せず、ただ虚心に理解する、という方向に行きました。

しかしかくも「盛り沢山」の論文というのも邪道ではないかと、反省するところもあり、そうしたスタイルは人には勧めません。しかし彼の当時、僕はあのようなスタイルでしか欠けなかった。それを審査し、パスしてくれた方には、ただただ感謝しています。そうした論文でしたが、少数の方の目にはとまることができました。去年東京大学経済学を定年退職された奥田央さんが、その一人です。ソヴィエト経済史、とくにソ連の農村社会史の第一人者

です。いただいた『ソヴェト経済政策史』をパッと読むと[6]、僕の論文のかなり重要なところを引用してくれていたのです。まさか引用してくれるとは思わなかったです。びっくりしちゃいました。奥田さんには恩義があるんです。あ、もう一つありました。和田春樹教授の説を批判したら、和田先生が『農民革命の世界』っていう自分の論文集を出した時に[7]、わざわざ僕の名前を挙げて、「ここを石井規衛氏の指摘により修正する」って注記されていた。これには心底驚きました。仰天したっていうのが一つあります。それから溪内先生に対しても批判的な注記をしています。まったくの怖いもの知らず、と言うところなのかなあ。それでも溪内先生の還暦記念論文集に寄稿するようさそわれましたし、先生の出版される書物もすべて送って下さった。まったく頭が下がる思いです。

修論の話を長々としましたが、最後にもう一つ逸話があります。僕が神戸に勤めて数年して、ダニーロフさんが初来日しました。やがて彼はペレストロイカ期のソ連で、活発に発言するようになり、ロシアの農村社会を破壊したスターリンの政策を徹底して批判しました。かれの主張の内容は、ややブハーリン路線に沿っていたものと言えるでしょう。プリンストン大学のコーエンに近かったと思います。当時すでに僕はちがう考えになってしまっていました。招聘者の奥田さんがダニーロフを囲むシンポジウムを日光でやる計画を立て、「お前は専らダニーロフに依拠して卒論書いたから、そこでしゃべれ」って言うんですよね。僕は「困ったなー」ってね。しかも「ロシア語でやれ」って。どうしたらいいものかって。それは今から26年前の1987年の10月のことでした。なんとかA4数枚のペーパーをたどたどしいロシア語で書いて報告しました。それで彼が帰って、1988年の3月かな。『歴史の諸問題』という日本の史学雑誌みたいに権威のある雑誌がソ連であるんです。そこに掲載されたラウンドテイブルでダニーロフが、日本で石井がこういうことを言っていると発言しているのです[8]。あれにはひどく恐縮しました。だってダニーロフとはすでに考えが違ってしまっているのに。

クリオ：そのダニーロフさんが来日されて、ミニシンポジウムをされた時に、ダニーロフさんに、先生の研究のスタンスっていうのはお伝えされたんでしょうか？

石井：伝えてないですよ。そんなことを伝えられっこないじゃないですか（笑）。だからダニーロフに申し訳ない、なんかちょっと裏切り者のような。だけど、あの頃、外国の雑誌に名前が載ると、なんかすぐ評判になるという、今とちがってね。今皆載るんでしょう？君らの書いたものは。

クリオ：載せることを目標に頑張っています。

石井：もう、とにかくそうやって名前を指摘してくれて、ちょっと色々コメントしてくれた。ああいうときの気持ちはなんなのだろう、天にも昇るような思いとでもいったらよいのでしょうか。だけど同時にやましさもつのってくるのです。分かる？ダニーロフさんには、道を歩くたびに、いつも名前を呼び続けていた。数年前に不慮の事故でなくなりました。

ところで不思議なことに西洋史の先生出てこないよね？今までの話で。そうでしょ？

クリオ：そうですね。確かに、中心（？）から外れたテーマをやっていると、ドンピシャな先生がいらっしゃらないということは往々にしてあるかと思うのですが、すると先生の場合、

---

[6] 奥田央『ソヴェト経済政策史』（東京大学出版会、1979年）。

[7] 和田春樹『農民革命の世界』（東京大学出版会、1978年）。

[8] V. P. Danilov, "Zemel'nye otnosheniia v sovetskoi dokolkhoznoi derevne", *Istoriia SSSR*, No. 3, 1958, pp. 90-128.

指導教官はどなただったのでしょうか？
石井：柴田三千雄先生。つまり、体制を発見し、かつ政治を発見したって言いましたよね？このことは、じつは西洋史の先生方のお仕事を発見することでもあったのです。体制とは、党と国家が一体となったダイナミックな政治の世界です。ならば、そのダイナミックな動きの起源についての関心がおこるのも、ごく自然な流れでしょう。それはソ連世界の起源であり、いわゆるロシア革命の時期にあるわけです。そのロシア革命の時に、党と国家が癒着している状態、すなわち党＝「国家」体制がどのように形成されてゆくのか、という問題が出てきます。それにこたえた文章の一つが、『社会運動史』に載せた一文と、もう一つが、『歴史学研究』に掲載された論文です[9]。特に、後者の論文です。そこでは、民衆を指導したとされる共産党を一枚岩ではなく、指導集団と被指導集団との二つのグループに分け、その間のダイナミックな政治的相互関係が分析されています。全体として、共産党内の指導集団、共産党系の活動家集団（ミリタン）、そして大衆、といった三つの複雑な相互関係でもって、1917年ロシア革命期の政治動態を説明しようとしました。主に依拠した史料は、一番上の共産党の議事録、プロトコルとか、ああいうのを見ました。この時は柴田先生のお仕事（分析方法、概念）を利用しています。とくに重要だったのが、それぞれの集団が自律的であるという、考えです。柴田先生のフランス革命期やパリ・コミューンのお仕事がなかったならば、僕はボリシェヴィキの「十月武装蜂起」論（歴研論文）を書けなかった。つまりこのことは、党＝「国家」体制の「始源」が書けなかったのです。そういう意味では私にとって大きな意味を持っていたと言えます。さらには「古参党員集団の寡頭支配」の構想がだんだん導きだされてきました。あれは実は柴田先生と、もう一人は二宮宏之先生のお二人をかなり利用しています。だから政治とか国家とか体制とかいった対象（党＝「国家」体制）を見つけ、明確に対象設定することによって西洋史の先生方のお仕事との接点も見つけることができたわけです。補足して説明すれば、党員集団も各地に党委員会を組織しており、それぞれが地域的な一種の社団を構成しているのではないか。また彼らは党歴の長さを基準にしてもグループ分けされている。何年入党者、何年入党団体っていう、ね。長い党歴の人ほど発言権が高まることで、独自のヒエラルヒーを形成しているのです。
クリオ：党歴の長さで分けられている、という。
石井：そう。それによって序列がなっているっていう。だから、これは一種の社団に近いんじゃないか。つまり、共産党っていう一つの社団内部に地域別社団と年齢別社団がそんざいしていたのですよ。こうした考えは二宮先生が1977年ころだったか、東北大学で行った報告の内容からヒントを得ています。あの「フランス絶対王政のなんとか」っていう。実を言うと二宮報告は聞いていません。それをいち早く、坂井栄八郎先生が『思想』に掲載された論文で詳しく紹介されています[10]。ものすごく面白かった、という印象が残っています。坂井先生を通して二宮先生を発見したという次第です。あの図式を利用した中では、たしかにフランス史固有では大勢いると思いますが、少なくともフランス史以外では僕は二宮先生の着

[9] 石井規衛「革命ロシアにおける党＝『国家』体制の成立」（『社会運動史』9号、1981年所収）；同「ロシア革命からソヴェト国家へ――指導集団と活動家大衆（1917年9月 - 1918年5月）」（『歴史学研究』515号、1983年所収）。
[10] 坂井栄八郎「一八四八年の革命とドイツ諸国家――ドイツ市民革命論のためのノート（1848年――近代社会の転換点）」（『思想』645号、1978年所収）。

想をかなり早く盗んだ一人じゃないかな、と思っているのですけどね。以前、二宮先生の図式にヒントを得て、ロシアの1861年の「農奴解放」とは農奴なる集団を独立した社団へ編制し、帝国内で格上げすることであったとの解釈を公にしたことがありましたが（1983年）、それより前に、ソヴィエト期ロシアに二宮テーゼを当てはめようとしていたわけです。

それから、あと成瀬先生の国制史上のお仕事も忘れることはできません。国家を発見したら国制史への関心がわいたとしても、おかしくはないでしょう。官僚制が非常に強い革命前のロシア帝国を理解する上で、成瀬先生のお仕事から学ばせて頂きましたね。あ、それから一時期あのオットー・ブルンナーって聞いたことあります？あの『ラント・ウントなんとか』ってのの[11]。

クリオ：『ラント・ウント・ヘルシャフト』

石井：そう、あれがなんか随分流行りました。オットー・ブルンナーの翻訳ありますよね？岩波で。『ヨーロッパ精神のなんとか』を読んで勉強しましたね[12]。

結局僕は、ロシアだからこそなのかもしれないけど、まず自分自身の核を作り、発展させなくてはいけないという思いがあって、その営みに何が使えるのかという、やや失礼というか、傲慢というか、そのような仕方で先人の仕事に対応きたのかなぁ。本当に使えたのが、今挙げた先生方々のお仕事だった。ぶっきらぼうな言い方をすれば「使えた」っていうことですね。だけどそれは、学んだって言っても良いかもしれないですよね。

クリオ：それが、その先ほど仰った、修論を書いた後に先生方の仕事を発見したという。

石井：発見し、そしてそれらがどんどん大きくなっていったのです。「あー、すごいなー」ってね。

クリオ：あくまで、その自分の研究の核が出来た上で、見渡してみると、色々と見えてくると。

石井:そう言えると思います。だから僕は最初にべちょっとコバンザメのようにくっついて、勉強しなくて、一人でコツコツやっていました。そのときでもチラチラ先生方のお仕事を眺めやったりしていましたよ。だけれども、そのさいに、自分がコツコツやってた細かなテーマを常に広げよう、人に納得してもらおうという意思的努力が伴わないと、だめなのではないでしょうか。そうでないと人を発見するという醍醐味を味わえません。自分の中に閉じこもってばかりでは。僕は、何とか人に理解してもらうようもがいてる時に、そういった先生方を発見しました。それで、素直に、新たな目でそういった先生方のお仕事を見て、学ぼうという気持ちがわいてくる。意外に、模範生みたいな言い方になっちゃいましたね（笑）。

学生：他方で、例えば、同世代の院生との関わりなどはどうだったのでしょうか？

石井：同時代の院生と交流するほどの気持ちの余裕は、当時はなかったですね。今から思うと、そういう態度はあまり良くないと思う。健康的ではない。それにしても心理的にまったく余裕がなかったのです。自分のことで精一杯でした。そういうのって、自分勝手になりやすいんじゃないかな。くりかえしだけど、自分勝手になりやすいのをある程度抑制してくれたのは、逆説的ですけど、「お前の書いてるものはよく分からない」とよく言われたことだっ

---

[11] O. Brunner, *Land und Herrschaft: Grundfragen der territorialen Verfassungsgeschichte Südostdeutschlands im Mittelalter*, Baden bei Wien, 1939.

[12] O. ブルンナー著（石井紫郎、石川武、小倉欣一、成瀬治、平城照介、村上淳一、山田欣吾訳）『ヨーロッパ―その歴史と精神』（岩波書店、1974年）。

たのです。そうすると、分かってもらおうと人間、結構努力するものなのです。謙虚になって、自分勝手になるのが少しは抑制されのではないか、いまはそう理解しています。かえって「分かった、良いよ」って誉めるっていうのはね、その人間を堕落させるんじゃないかって、気がしますね。かえって厳しい態度で臨んで、分かんないなら分かんないって言っちゃう方だなぁ、僕は。「もうお前全然分からん」と。お互いに優しくし合っちゃだめだ、という思い込みがあるかもしれません。

クリオ：それでは、大学に赴任された後の学生との関わり合いの中でも、そういった感じで指導されてきたんでしょうか？

石井：う～ん・・・。かならずしもそうではなかった。かならずしも一貫できなかった。神戸大学は博士課程が出来たばかりで、博士課程の院生はほとんどいませんでした。しかも赴任当初はまだ博士課程を担当していなかった。もっぱら学部生と修士課程の院生でした。その場合、今あなたが言ったような風に接するより、どちらかと言えば学生を優しく教えることに力点がおかれることになる。こちらがもがいているときのような態度で接するわけにはゆかなかったですね。だから学生を指導することに、少々戸惑ったことは事実です。やっぱり、自分で勉強するのと、講義しながら教えることは全然違うんですよ。ということで、一貫した講義を試行錯誤しながら続けたというのが神戸大学時代でした。卒業論文の執筆を神戸大学では非常に重視していました。学生一人の卒論の構想や中間発表に時間をかけてね。また学生は結構授業よく聞いてくれました。授業がうまくゆかないと、まる一日不愉快というか、自己嫌悪ですね。だから随分助かりました。話がちょっと違うけど、神戸っていうのはね、賢い女性が多かった印象を持っています。親が下宿しちゃ駄目だとかいうので、あの辺の賢いお嬢さんが神戸に来るんですよ。

クリオ：他所に行くのではなく、神戸の地元か、その周辺の子が来ると。

石井：そうそう、そういうことです。周辺には香川県とか、奈良県も入りますが。そうなんですけど、もっと欲を出して欲しいな、って思いましたよ。

クリオ：学習への？

石井：生き方としてもっと野心的になってほしいと。

クリオ：当時はやはり、今ほど大学院に女性が進むという状況ではなかったのでしょうか？

石井：そうですね。世の中とかかな。やっぱり女だから、ということで…。

クリオ：引いてしまう？

石井：そう。そのことがねえ、歯痒かったですね。君達、やろうとすればできるのじゃないのか、って。もっと可能性がたくさんあるのに、どうして女だからって身を引いちゃうの、というのがね、すごく歯痒かった。そういう記憶がありますね。

クリオ：神戸時代といえば、栗原優先生とのご関係についてもお願いします。

石井：栗原さんはナチズムを研究する場合、ドイツ史の文脈だけではなく、ひろく現代史として、同時代性を重視する方でした。そのためにナチズムと同時代のソ連史研究にも、深い理解と関心をもっていらした。出身が文学部系の西洋史学ではなく、東京大学教養学科の国際関係論だったことと無関係ではなかったと思います。学風というよりも、カルチャーが異なっていた。あの方には感謝しています。「ちょっと石井くん、君は研究室にこもりすぎるからダメだよ」と、よくお酒を飲みに連れて行ってもらいました。ドイツ料理の店で太いソー

セージをパクパクと食べている姿を、いまでもよく覚えています。

クリオ：神戸大学での講義や研究はいかがでしたか？

石井：研究についていえば、修論で扱った時期を一方では前へ、他方では後ろへと、広げていく以前からの作業を続けていました。とくに集中的に取り組んだのが、革命以前のロシア史です。講義もおもに革命前の時代についてでした。そうした方向には、一つのきっかけがあって力を入れていました。現在神戸市外大教授の高橋一彦氏から、レニングラード学派の一つの集大成とも言える『専制の危機』の書評を依頼されたことです[13]。革命前のロシア帝政期を扱っている時に、成瀬先生や二宮先生といった方の本も参考にしましたが、明治維新期の日本の本も勉強になりました。とりわけ、石田雄は勉強になりました。ただテーマをひろげようとすると、今と違って文献や史料を集める作業が簡単にはゆかず、けっこう苦労しました。それにしてもあのときはよく勉強させられました。

クリオ：それでは、東京大学に赴任されて以降はどうでしたか？

石井：本郷に来たら、神戸大学とは勝手が違っていて、ちょっと戸惑いました。東大にきた直後、重点化がなされて、学部生や院生の指導の仕方が変わりつつありました。なんといっても学生は、自分で学び、その上で大学院に入ってくるものなのだ、という気持ちが、神戸大学時代よりも一層強まっていきました。僕らの先生もそうでしたから、あえて指導ということを考えてはいなかったのではないでしょうか。今から思えばですが、やっぱり昔の先生方は時代とか世の中の大きな変化と突合せることを通して、自分の研究テーマを決めていったのではないですかね。時代状況といつも緊張関係を維持しながら、自分を時代との対話の中にまず身を置いた上で、研究史との対話を行っていました。なによりも時代との対話だったのですよね。そうした対話を通してテーマを見つけて、研究をしていった。時代に放り投げて、自分で探してやれ、じゃないとものにならないよ、というものでした。教員も時代を共有する仲間だったわけです。いわば時代に強いられて勉強していたのですよ。だって戦争になれば死んじゃうかもしれないような時代に、何でも大学の先生が教えてくれるのではない。そういうような時代だから、自分で何かテーマを考えなければいけないんですよ。それが果たして自分が死んだあとに残るものなのかどうか、残すべきものなのかどうか、そういった時代との緊張関係です。もっと前だったら、極東の日本をどうしたらいいのかっていうことですよね。極東の、欧米諸国に挟まれて、こうなっている日本をどうしたらいいのかを考えざるを得なかったはずです。皆、いわば「日本を背負う」エリートですから、そうやってテーマというものを考えます。だから、改まって指導なんていうことをしないんですよ。せいぜい外書講読くらいなものですよ。おそらく、その極端な例が…もしかしたら、林先生のふてくされた態度も、「自分でやれ、勉強なんて」っていう、そうことなのかもしれないですね。「さんざんお前ら暴れ回って、あとは知るか」っていうこともあったけれども、テーマは自分で見つけるものなんですよと。

そうした指導は、よく言えば放任であり、悪く言えば何もしないことですよね。だけど、僕も、指導教官や他の先生方も、そうやって研究してきたんだと思います。だから、柴田先生がよくゼミで冗談を言ったり、世間話をするときがありました。あれは単なる息抜きのための冗談なのではなくて、学生は世の中とどういった対話をしているのかを、世間話をする

---

[13] B. V. Anan'ich i V. S. Diakin, dr., red., *Krizis Samoderzhaviia, 1985-1917*, Leningrad, 1984.

ことによって探っているんだろうと思います。探ることによって何か言えることがあるのかないのかを探るという、大変な高等テクニックだったのではないでしょうか。

クリオ：時代的な背景と言いますか、学生時代に見られた溝のように、先生が学生時代に見ていたものが、教員になって違って見えてきたということですね。

石井：そういうことでしょうね。だから、そういう意味で林先生はたいした教師でした。それじゃあ今のような世の中はそういう風にはいかないなと思います。それはやっぱり、教員と院生が密になっているんですよ。その分、時代との対話という厄介なものが、今の時代に必要なのか、僕はわかりません。だけど、少なくともタックスペイヤー（tax payer）のことも考えてもいいんじゃないでしょうか。そういう意味では、勤めてみて初めて、教えるということに直面しますね。だから、そういったことで、東大に来て、学生に対する、特に院生に対する関わり方がずいぶん変わったなと思います。

クリオ：それから、授業についてもお尋ねしたいのですが、石井先生の授業といいますと、あのいつもの「自由かつ大胆に論述せよ」という試験はいつ頃から始められたのでしょうか？学生の間では名物になっているのですが。

石井：あれは神戸時代、いや、それ以前の非常勤時代のころからやっていました。あれはまず、マルバツ式や語句説明の試験もつまらない、だから、自分の思うところを書くということですね。それともう一つは、こちらが意図せずに不整合な説明をしたり、間違ったことを語ったりしたことへの学生の批判意識を期待しているのです。学生がどういう反応をしてくれるのか、そういう意味でああいった形式の試験を続けてきたのです。副産物として、学生の側が教師のくねくねした講義をうまくまとめてくれるということがあるんです。「僕はこんなに立派な講義をしたのか」って。そういうのを書いてくれるとすごくうれしくなるんだなぁ。そして、次回もこういう風に皆が理解してくれる講義をやろうと鼓舞されますね。だけど試験だから、もちろん書いてある内容次第で差はつけます。それは当然です。でも、教員皆がよく言っていることですけど、授業を聞く学生には感謝しています。そもそも講義には大変なプレッシャーが伴うものです。なるべく毎年講ずる内容を変えないといけない。実際そうした講義をしないと、教員は勉強しなくなる可能性はある。そもそも学生は怖い。一人でも目をこちらに向けて聞いている学生が授業にいるのは怖いですよ。だから、そういった「ストレス」を与えてくれている学生に感謝しているんですよ。神戸でこういうことがありました。当時の教養の先生が病気なって、代わりに授業をした時に、新入生にロシア史を教えたことがあります。そのうちの一人が3年や4年だけでなく、大学院に入ってまで僕の講義に出るんですよ。彼一人のために毎回授業を変えるんですよ。それがたいそう辛かったです。でも、そのおかげで勉強になったなぁ。

クリオ：ありがとうございます。ここまでは学生との接し方、教育のお話を伺いましたが、研究の方はいかがだったのでしょうか。これについては、石井先生のゼミの皆さんから。

石井ゼミ生：では、まず先生の主著としては、『文明としてのソ連』がある訳ですが[14]、これはどのような経緯でお書きになったのでしょうか？

石井：まず、文明って言うタイトルはさ、社会主義とか何とかっていうステレオタイプ化された言葉は超えたいと思って、ひとつの独自の文明として、距離感を持って見ようというこ

[14] 石井規衛『文明としてのソ連――初期現代の終焉』（山川出版社、1995年）。

とですよ。ローマ帝国もひとつの文明かもしれません。桜蘭のように中央アジアに栄えてふっと砂漠の中に埋もれてしまったものも独自の文明です。だから、「文明開化」で使われるような意味とはまったく異なります。そういう距離感を持ってみようと言うことです。それから、「社会主義」というのは色んな意味合いや価値観がチャージされてしまっている。色んな概念規定と絡み合っています。だから僕は社会主義という言葉を使いたくなかったんですよ。だからソ連文明がありましたと。単純なことじゃないですか。それから、スターリンに対して、僕は文句は言いません。端倪すべからざる男なんです。善悪を超えちゃったような男なんです。それでいて、世界中の人々の関心をひきつけたわけです。そういったことを考えれば、他に言葉が使いようがないですよ。それで「文明として」って付けました。

クリオ：イデオロギー的な色眼鏡ではなく、ソ連そのものを見ようと言うことですね。

石井：そういうことでしょうね。さらにソ連の本質的な特徴は、外界への大きな影響力を及ぼしたことにある、ということも忘れてはならないでしょう。だとしたら、なおさら文明としてみようと言う以外に、ないのではないかと思いますね。

石井ゼミ生：それとは別に2002年に演劇国家論を出されている訳ですが？[15]

石井：演劇国家とは、それほど複雑な考えではないと思います。あれは、かなり前、歴研に掲載した論文を書いた際に着想したもので、それを少し膨らませたものです。とくに、ボリシェヴィキの「十月武装蜂起」から「ソヴィエト共和国」宣言までの政治史を、講和交渉と関連づけて説明しようとした際に着想したものです。それから神戸の時に講義で喋ったらしいですね。そもそもソ連文明自体が演劇的なんですよ。ユートピア性を、つまり社会主義であると、「自由であるんだよ」と演技しながらユートピアをばらまいた。どんな人間関係にだって演劇性があるんですよ。とりわけソ連はイデオロギー的なリーダーであり、種々のユートピアを発信してきた。さきにも指摘したように、そもそもロシア革命はロシアの革命ではなくて、外に広がりゆく革命としても位置づけられていた。ロシアにおけるボリシェヴィキの行動は外国に対してショックを与えるはずのものとみなされていた。そういう意味では演劇的ですよ。国内においても国外においても、いずれにおいても演劇的でした。演劇的振る舞いの発端は1917年「10月」です。演劇的振る舞いを通して権力に就くことで、ボリシェヴィキはその後も演技し続けるように強いられてしまいました。そのことがソ連社会にとって重い負担としてはね返ってくることになり、最後はそれに耐えられなくなってしまった。そういう意味をこめて演劇国家論という表現で、ちょっと観点を変えたというか、捉え方を変えてみた、ということはありますね。僕は気に入ってるんですけどね。「こんなタイトルをつけて大丈夫ですか？」って言われたりしたけどね。社会主義であることを演技した国家って、何がいけないんでしょう。

石井ゼミ生：社会主義を演じているという発想はどこから生まれたのでしょうか？

石井：直接のきっかけは、現代国家にかんするシンポジウムの報告でした。ソ連それ自体が社会主義というのはあまり頭にないんですよ。社会主義とは、ある種の共同意識レベルのものではないのか。「社会主義」であるとか、「社会主義でない」とか、その地に生活する人々の共同意識のレベルに関わるものではないのか。ソ連の経済制度とは、ソ連経済制度でこそ

---

[15] 石井規衛「社会主義を演技した国家――ソ連国家再考」（木村靖二、中野隆生、中嶋毅編『現代国家の正統性と危機』［山川出版社、2002年所収］）。

あっても、それを外界の人間が「社会主義経済制度」とするのは、言い過ぎか、出過ぎた行為ではないのか。そうすることは、当該社会の無数の違いを持つ一人一人に特定のレッテルを貼ってどうのこうのというのはね、そこに生きている何千何万っていう人々の運命を下手すると左右しかねないレッテルなのですよ。それは傲慢というものですよ。そうやって社会に対してレッテルを貼って操作するというのは。過去について、社会について、ある概念を使うというのはよっぽど慎重にした方がいいということです。その言葉の裏には生きている人間がいるということです。一緒くたにするのはよくない。社会主義であると言われて、「自分のところって、社会主義なの？」って皆びっくりしちゃうんじゃないですか。それにもかかわらず、社会主義だからどうのこうのというところに議論を持ってきちゃったら、なおさらおかしい。こういう私の考え方は珍しいかもしれません。

また、ソ連が崩壊したから、社会主義が崩壊したとかね、全然関係ないことでしょう。ソ連が崩壊したことと社会主義とかマルクスの思想とは、全然関係ないんですよ。だけど、関係があると思われ続けてきたということも歴史的な事実ですよね。その事実を無視したら、歴史研究としてはおかしい訳です。それは社会主義であると演技し続けてきたことの結果でしかないのではないのか。そこの微妙なところを社会主義を演技したという言葉を使えば、うまく処理し両立させられるのではないかなと思ったのです。

石井ゼミ生：一番最近の論文になります、「東アジア近現代通史」の中の「ロシア革命とコミンテルン」についてですが[16]、先生は先ほど外交の発見ということをおっしゃっていましたが、外交とロシア固有の文明というものをつなげてそれが内戦の中でどう広がって、アジアに伝播していくのかを書いてありますけれども、こういう着想というのはどのようにして出てきたものでしょうか？

石井：あれは今まで書いたものをものすごくコンパクトにまとめた部分と、それから内戦期を新しく見る見方と、党＝「国家」体制っていうものが持つ可能性・広がり、つまり単に中国共産党だけではなく、国民党にもこういうものだろう、ソ連のあり方の可能性をもっと広げて理解したいということで、あのような書き方をしたんですね。だから日本に対する影響と、これは思想史のレベルの問題が強いと思いますよ。それからもう一つは中国のナショナリズムを動員する上で、党＝「国家」体制が絶妙な役割を果たしたことです。でも、東欧の方は書いていない。どうせ君が書くだろうからね（石井ゼミ生、苦笑）。あれの執筆もずいぶん面白い経験だった。今年の四月に別のものがでます。こちらの方が日本に即したものになると思います。それはソヴィエト・ロシアの歴史位置と社会運動史かな。国民党との関係とか、ナチスとの関係をもっとやってみたいと思います。

石井ゼミ生：それも、石井先生の分析の核になるのは、党と国家の関係ということでしょうか？それを20世紀に広めて、ソ連から見ていくということでしょうか？

石井：核とまでいえるかわからないけれども、党と国家の関係のさまざまなあり方を軸にして、20世紀のダイナミックな歴史を整理し、あるいは分析することは、おおいに魅力をかんじます。ただその関係だけを取り出すと、かなりやせ細った結果しか導き出せないかもしてない。また、党や国家の定義も、あまりにもリジッドにすると、生産的ではないような予感

[16] 石井規衛「ロシア革命とコミンテルン――〈ロシア革命〉の誕生と東アジアへの連鎖」（和田春樹ほか編『世界戦争と改造――1910年代（岩波講座東アジア近現代通史３）』［岩波書店、2010年所収］）。

がします。以上の点を慎重に処理すれば、随分と面白いものがうまれると予感してます。
クリオ：それでは、ここからは少し研究以外についても伺っていきたいと思いますが、80年代から動いていくソ連をめぐる国際情勢についてはどう思われていましたか？
石井：当初、ゴルバチョフが出ようが誰が出ようがソ連は変わらない、と思っていましたし、全く興味をひかれなかったですね。そもそもゴルバチョフが登場した時期のことが、さっぱり思い出せないほどです。
クリオ：例えばアフガニスタン介入については？
石井：特段にびっくりするようなことはありませんでした。どうせソ連だからああいうことをするだろうと思っていました。ソ連国家が本質的に膨脹主義的である、といった理由からではないのです。そもそも広義の「冷戦」期とは、米ソ双方の、周辺地域への介入の時代でした。だからベトナムへのアメリカの介入と同じことを、今度はソ連が始めた、くらいにしか思えなかったのです。とくに深刻な問題として考えなかった。もっとも国力を大きく疲弊させたという点では、ソ連社会にとっては大きな意味をもったのでしょうが。
クリオ：どちらかというと、距離をおいてソ連の動向を見ていたということでしょうか？
石井：とにかく、ソ連内の動向にはあまり関心がなかったんですね。

80年代のソ連に戻っていえば、もうソ連で出版された本がつまらなくなる一方でした。もうほんとに読みたくないんですよ。ステレオタイプ化された文章の羅列です。たしかに読むのは速かった。斜め読みで済んでしまうほどです。つまんないなあと思って、若い学生に対してソ連史を薦めるのに躊躇するほどでした。イデオロギー的に風化してきたんでしょうね。力がなくなりつつあるように思った。1985年にゴルバチョフが出てきたとき、禁酒運動なんて馬鹿なことをやっているなと思っていました。最高指導者がどれほど若くなったとしても、体制の大枠や老人支配は続き、変化は起こらないと。ましてやソ連世界が消滅するなんて、ゆめ思いもしませんでした。

ところが次第に、政治的な自由化、言論の自由を認めるようになっていきましたよね。それを僕は止めた方がいいと思っていました。混乱を引き起こし、収拾がつかなくなるぞと。あの国はスターリンが作ったんですよ。スターリンが作って、それからまだ完全には抜けきれるほどまで成熟していない。そのためにはおそらく、なおまだ数十年、いやもっと時間はかかるだろうと。そうした段階にあるにも拘わらず、自分の創造主を、自分の父親を、政治キャンペーンといった、これまた今までのと同じ様な演劇的な手法で全面的に否定したら自滅だよと思っていました。ペレストロイカには、そういうところ、よくいえば「生き急ぐ」ところがあったと思う。言論の自由の規制はさておき、政治制度の民主化はほどほどにしておいたほうがいいと。僕は、ロマノフ朝ロシアと同じく、ソ連もいきなり政治的に民主化するのは混乱の基になるとしか思いませんでした。冷めきっていたのかなぁ。でも、スターリン時代の重さを、はたしてソ連の普通の人が一人一人、克服できてるのか？あなた方自身が、じつはスターリン時代の産物なんだよ、って言いたくなりましたね。つまり、スターリンが工業化もやり、戦争に勝ったときのシンボルにもなり、スターリンの政策とあなた方はほとんど切り離せないんですよ。それで切り離すためには、つまり、道徳的にも、精神的にも、内面的にも、政治行動とか色んなところにおいて自立できているの、と聴きたいくらいでした。演劇的振る舞いに翻弄されてきたソ連社会が、はたしてどこまで成熟できているのか、

僕は大いに疑問だったんですね。スターリンが死んだあとのフルシチョフ時代も、同じ演劇国家の別な一面ですよ。それでまたブレジネフがスターリンに回帰する。つまり、為政者の演劇に左右されるような国民は成熟できないのです。だからペレストロイカも、新しい演劇国家を作ることでおわるのかと、冷ややかに見ている部分もありました。もっと肝心なのはとにかく、スターリンという、キャンペイン上の敵を設定するのではなく、なによりも自分たちを内面的に成熟させるということですよね。もっと地に着いたものですよ。もっと具体的な、ロシアに現に生きている人と人との関係、そういった人達からなる地域社会、その地域社会からなる国家というのがまだないのです。誇張かもしれませんが、ソ連という枠は、スターリンの名でおいて作られてきたのだから、いきなりスターリンから離脱したら混乱するだけではないのか。ゴルバチョフはやり過ぎちゃったということでしょうね。

クリオ：改革期についてお話し頂きましたが、スターリンというかせを外す政策をやっていく中で、ソ連が解体していくわけですが、その解体について同時代的にご覧になって、どのように思われましたか？

石井：実際に崩壊するとは思っていませんでした。事態の急展開に驚いたことは、事実です。だから、これから話すことは、どこまでが今からの再解釈なのか。あるいは当時の印象なのか、自信がないのですが。お疲れ様でしたという思いもありました。大変だったなと、もっとゆったりした生活を保障されなきゃいけないなと思いました。冷戦とか核開発でお金もたくさんかかったわけでしょう。いつも政治動員、プロパガンダにさらされて、キリキリしているわけでしょう。そういう人達がのんびり暮らせるような生活をね。しかし、お疲れさまでしたというのは今の解釈ですよ。当時はそう語る余裕はなかったかもしれない。ただ、歴史家として、ソヴィエト期ロシア史を勉強してきたものとして、これからが本当に試されるときがくるなと、格好つけていえば、身震いする思いがしましたね。その場合、革命前もやるけど、逃げるような形ではけしてすまいと思っていました。最近は、ソ連史というのをソヴィエト期ロシア史といいます。そういった形で、ああいった強烈なソ連文明というか、すごい影響と衝撃を与えた文明が、いったいなぜロシア帝国からポッと出ちゃうのか、そのことを、ロシア史の文脈と、グローバルな同時代史の文脈で理解しようとしています。『文明としてのソ連』を書いたときに、僕の頭を常に占めていたのは、以上の「思い」だったわけだ。ほんとにこれから、真に問われていると思っています。そういった意味では面白いです。

僕は西洋史にいてほんとに良かったと思いますね。やっぱり歴史学って「学」と言われる、ある知的な歴史というものは、やっぱりヨーロッパ文明、西洋文明の理解の中から形成されてきたものです。そこで、色んな先生方と出会い、色んな先輩と、昔はみんな時代を超えて地域を越えて議論をしたりしていたんですよ。こういった経験は、これからロシア史が本当の勝負になるよって言う時に支えになるようなものですよね。

クリオ：そうしますと、学問について、もしくは歴史学については、先生はどのようにお考えなのでしょうか？これから研究を志す人へのメッセージのようなものをいただければ。

石井：研究史をよくやることです。それから同時代へのアンテナを常に張っておくことです。両方ないとダメです。研究史をやっておくということや史料を読んでいるということは外界から遮断した営みですが、時代へのアンテナを張らざるをえないのが、歴史学の本質をこうせいしているものなのですよ。だって、人に説明するものでしょう。つまり、博論を書いて

終わりじゃないんです。人に説明し、学生に説明し、場合によってはカルチャーセンターでもいいけれども、説明するんですよ。説明することと研究することとは、違います。あと、人間を扱っているということですね。人間の過去の死者、累々たる何十億もの死者と対話しているんです。歴史学って言うのは、ひとつに。死者との対話があります。死者と対話することと同時に、説明する相手は生きている人間ですよね。これから生きようとする人間。だから、その中でどうやって言葉を紡いでいくのかっていうこと。これは大変しんどい仕事です。君らが読んでいるのは死んだ人間ばっかりでしょう。われわれ現代史は、生きている人間もやるけれども、やっぱり、死者っていう無になった人間を扱っているわけだからさ。

クリオ：ありがとうございます。加えて研究者を志す人だけでなく、歴史学を勉強する学生に向けても一言お願いします。

石井：ずいぶん難しい問題ですね。勉強しようねというのもつまらないですし。論文を書く時にノイローゼになることがあります。史料が全く脈略がなく横たわっている状態で、一向に論として原稿用紙に書けないときがしばしばある。そのときに頼りになるのが研究史なのではないでしょうか。もう一度、今までの文献をとにかく読む。そういう時にさらに読みが深まる。研究史は助けになるんです。単に論文を書くときに最初に書き連ねるという、体裁上の事柄ではない。本当に助けになるものでしょう。それでも史料を整序するための最終的な手掛りは、直感なのかもしれない。忍法なんとかの術、じゃないけど、思いつくのを待つ。学生に対してはよく学び、よく遊び。本（今はKindleか？）読めっていうんでしょうか。NHKスペシャルをよく見ましょうかな。

クリオ：ありがとうございます。われわれからの質問は以上となります。石井先生どうもありがとうございました。ここにいらっしゃる皆様からご質問はありますか？

学生：『社会運動史』が70年代に刊行されていましたけれども、この度論文も執筆されました[17]。このテーマについて、石井先生はどのようにお考えになっていて、どのようにコミットされていますか？

石井：面白かったんじゃないですか。戦後の日本の歴史知が、マルクス主義とかそういったイデオロギーに、戦後史学が規定されていったのが、だんだんと緩み、解体し、新しいものを模索していたところに、社会運動史研究会は生まれたんじゃないですか。一見両立しがたいベクトルが共存している。一方で喜安朗さんのような人もいれば、北原敦さんとか、木村靖二さんのようにファシズムをやる人もいる。社会運動史研究会というのは、単なる「社会運動の歴史に関する研究会」ではなかったところが、非常に面白いものでした。

つまり、社会運動史っていう名前は付いているけれども、問題はどういうバックグラウンドで結果的に社会運動史っていう研究会や雑誌ができたのか、そのバックグラウンドの方が非常に重要だっていうことなんですよ。だから社会運動史に書いてあることそれ自体と、その背景、その両方を見ることが必要だったのじゃないでしょうか。

---

[17] 石井規衛「『ソヴィエト・ロシアの時代』の歴史知と『社会運動史』」（喜安朗、北原敦、岡本充弘、谷川稔編『歴史として、記憶として――「社会運動史」一九七〇～一九八五』［御茶の水書房、2013年5月刊行予定所収］）。

学生：背景というのは戦後史学の？

石井：そういうことですね。僕にとってそれがとても居心地がよかった理由は、ソ連世界自体が、そうした両極端のベクトルを内包していており、そのことが共鳴し合ったからではなかったでしょうか。雑誌としては1985年に刊行を終えたけれども、一人一人は完結させていないんじゃないでしょうか。継続させているのだと、そう思っています。

学生：私たちの世代から見ると、その頃、先生は30歳になるかどうかというところですよね。そういう歴史学の、戦後歴史学の大きな流れの中で、その変動を認識し、自らアクションを起こして、そういった運動を起こしていくっていうことは実際に携わっていらっしゃった先生はものすごいことに携わっていたという認識はあったのでしょうか？

石井：研究会を立ち上げていった人には、ある明確な思いがあったんでしょうね。だけど僕が本郷に行ったのは1970年ですよ。できた直後に参加して、経緯などはよくはわからない。だから、そのような「ものすごいことに携わった」という意識はなかったなぁ。なお当時の僕は、まだ20歳の前半でしたけど。

学生：例えば、社会運動史の中で、もう少し上の世代の方々と石井先生との運動自体に対する感じ方、コミットの仕方は異なるのでしょうか？

石井：全然違いと思います。だって、僕が『社会運動史』で書いたのは体制論ですよ。党＝「国家」体制。いわゆる社会運動の歴史とは違う。さっきも言いましたけれども、社会運動史っていうタイトルに惑わされてはいけないということです。核心は、時代と個との対話に

あるのですよ、おそらく。時代との緊張関係の中で繰り広げられる対話をきっかけとして、人は結びついてゆくのではないか。そうして結び付き合った集合が、便宜上「社会運動史研究会」という名前を付けられていただけなのです。かなり「僕流」の解釈ですが。とまれかくまれ、時代との対話、それとの緊張関係を共有しているっていうのが一番重要な点だったのです。

学生：今の学生でそういうことを共有することはできますか？

石井：不可能とは言いませんが、とても難しいのではないでしょうか。だって、いま、どうやって時代と対話するんですか。せいぜい「アベノミクスで株価が上がった、良かった」といった事柄についてではないですか。学生は就活に追い立てられ、じっくり時代と対話している余裕がない。大学院に進学したらしたで、博論を一刻も早く書き上げ、その上でどうやってポストを獲得したらよいのか。お互いに競争し合っているアトムみたいになっています。その一方で、学問状況も、すでに相当程度進行している蛸壺化が、いっそう加速化してゆくことになります。時代と主体的に対話する余裕も術もない。さもなければ、そうした生き馬の目を抜くような状況から逃げるしかないですよ。

クリオ：逃げるというのは例えばどういったことでしょう？

石井：自分の今いる世界から。でなければ、有力者のコバンザメになるか。たとえば科研をなるべくもってくる人間のコバンザメになることです。

クリオ：石井先生はコバンザメであっても仕方がないと思われますか？

石井：仕方がない。時勢には逆らえない。これからは、いっそうそうなっていくんじゃないですか？そうなると西洋史研究室共同体も解体しちゃいますよ。つまり、科研を集める人間のお互いの熾烈な競争になるんじゃないかな。科研を集めてくる人間は外国に行きやすくなります。それだけ一次史料も集められる。論文の評価も上がって就職しやすくなるかもしれない。

クリオ：極端な業績主義や、蛸壺化ということになっていくのでしょうか？

石井：そういう風になっていくのでしょうね。それを克服するためには、ちょっと唐突だけど、博論をもっと簡単にする必要があるかもしれない。自動車の免許ほどにしてしまうんです。あとはデータを盛り込んだ提言みたいなものをどんどん書いていく。そうなってくるともっと議論が増えるんじゃないかと思うんですね。

クリオ：蛸壺化するよりはもっと広く共有できる問題意識を発信していく方がいいということでしょうか？

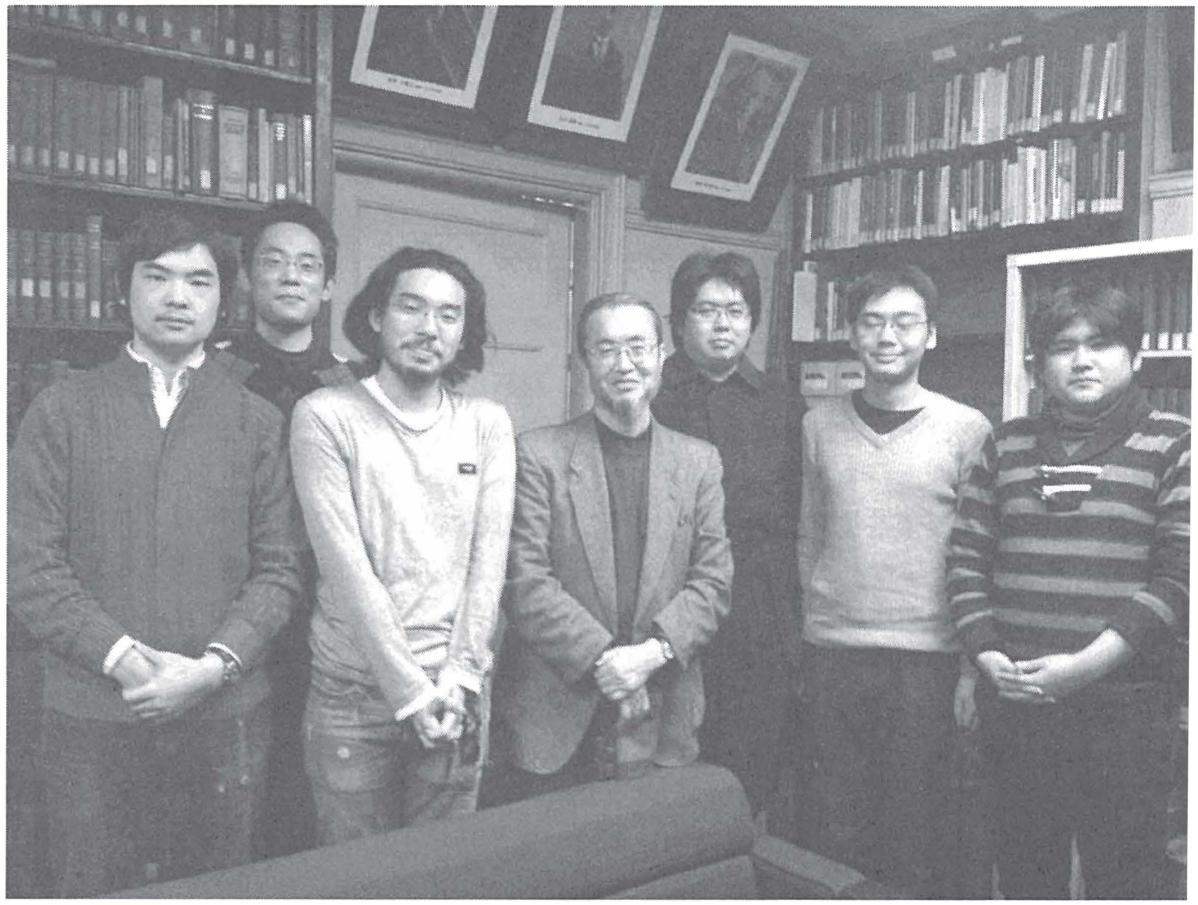
石井：完全に向こうと行き来が自由で、国籍もどうでもよい、就職のポストも世界で自由にどこでもできるのならば、いくら蛸壺化してもいいと思いますよ。でも、いまのまま本当に蛸壺化したら欧米の研究者に敵わないですよ。日本でヨーロッパ史研究が蛸壺化してどうするんですか。

クリオ：史料のアクセスとか言語の問題がありますよね。

石井：どこかでやっぱり日本にいる。この現実を、このジレンマをどうすればいいですか？

クリオ：日本人として西洋史をやる意味ということですね。

石井：古くさい問いだけどね。だけど、そんなことを言ってながら、東大は国際化と言っている訳でしょ。どうしたらいいのかな、西洋史の場合。実に奇妙な「学問」です。とはいっ

ても、国際化とか欧米に通用するっていうのはヨーロッパ史をやる以上当たり前なんだけれども。一番問題なのは就職したあとですよ。だからこそ、博論のハードルを低くして、議論を自由にしていけばいいと思うんですけどね。君たち（クリオ編集者）は中世史が多いでしょ。中世っていうのはヨーロッパ史の「へそ」だ。そんなにチマチマしていても仕方がない。やはり総長の言い回しを借りるならば、タフな東大生になるしかない。これからどういうことが起こるか分からない。ノイローゼになりそうだけれど、それを自ら克服してゆくしかない。制度が部分的に助けとなればよいのですが・・・。

クリオ：ありがとうございます。中世史を持ち上げていただいたところで恐縮ですが（笑）、時間もだいぶ過ぎておりますので、これでインタビューを終了させていただきたいと思います。石井先生、ありがとうございました。本日は長時間お疲れ様でした。